



昭和2年7月7日創立

世田谷区立東大原小学校

# 同窓会報

平成21年度 第2号  
(平成22年3月発行)

発行所  
世田谷区大原1-4-6  
東大原小学校同窓会

発行人  
宮川英子

## 「明るく若々しい同窓会」になるための取り組み

会長 宮川英子（十三回生）

どうすれば若い力を盛り上げることができるか。

どうすれば若い人の意見を汲み上げることができるか。

試行錯誤する私の

心を汲み取って、その

心配を払拭するかの

ように、若い評議員た

ちが積極的に活動を

してくれました。お蔭

様で同窓会は「楽しい

会」になりました。

子ども達のために、学校行事の運動会、展覧会にも理事たちは足を運んで拍手を送りました。

展覧会には八十周年記念に贈った陶芸釜を使った個性豊かな作品がたくさん展示されていました。

地域の活動にも積極的に協力しました。おやじの会のデイキャンプ、遊び場開放委員会主催の餅つき大会にも参加しました。餅つきでは「むかし取った杵柄」で神谷

関根、臼井各理事の杵さばきが光りました。「みんなで温泉へ」と企画した旅には十九名が参加し、

温泉とカラオケを楽しみました。念願の「ゴルフ」も九名参加で

実現しました。前会長岩下氏も参加されて楽しいプレーとなりました。

同窓会のホームページも上原

理事（五八回生）の協力で楽しい

交流の場へと育っています。十

四回生の娘さんがホームページで老齡の父親の母校を発見し、



宮川会長



餅つき大会への参加

メールで連絡を取り合って、空襲で引越して以来初めての母校訪問を果たし、旧友とも再会することができました。

二十二年度はかつての学童疎開のルーツを訪ねて、疎開を経験してない世代もその時代の苦難を知り、検証しようと計画しています。多数の参加を願っています。

校門脇の掲示板も見てくださる方が多くなって嬉しいことです。先日「掲示板を見たけど次の温泉旅行に参加したい」と初めての方からお電話をいただきました。

四月の定期総会には新しく同窓生になった中学一年生歓迎と還暦祝（三五回生）と成人祝（七五回生）をしたいと思います。該当の方々の参加をお待ちいたします。

年会費（千円）を納入して同窓会活動に参加していただける方々をお待ちしています。

（卒業後八年間は年会費はいただきません）

## 平成二十二年定例総会のお知らせ

左記の要領で平成二十二年定例総会を開催いたします。

同窓会会員には出席のほどお願いいたします。

またまだ会員になっておられない同窓生もお誘いあわせ

ご来場のうえ会員になっていただきたくお願いいたします。

日時：平成二十二年四月一八日  
三時から五時

場所：東大原小学校体育館

内容：総会議事、講演会、懇親会

講演会は二回生の岸田義明さん、十四回生の山縣武典さんをお呼びして、十三回生の宮川英子同窓会会長を交え、昔の下北沢、戦前の小学校生活のお話を座談会の形式で伺います。



みんなで温泉へ

# 寄稿

ふりかえって

今村（能勢）綾子（元教諭）

## 私の旅順回想

旅順師範学校女子部、校門の横に大きく美しい桜の花が咲き誇っていた。満州では厳しい寒さで桜の木は育たないと言われたが、旅順・大連が開花の北限だと聞いている。

奉天朝日高女六回生松組の、「ライラック満州育ちの私達 第二集」が再刊になり、戦争を知らない次の世代に私の体験を、知ってもらいたい一心で以下の文を書いた。

東大原小の子ども達は素直で仲良しだった。個性豊かでちよっぴりいたずらな面もあり、苦勞した時もあった。子供たちの保護者の協力も素晴らしかった。つい最近まで子供たちの六年一組の級会を年一回は開いていた。

## 終戦

昭和二十年八月十五日悲しくも戦いは終わり、日本は負けたのである。とても信じがたい現実であった。頭を深くたれ、止まらない涙をどうすることも出来なかった。

旅順の新市街は、アカシアの街路樹が立ち並び、きれいな緑でいっぱい町並みであった。

ソ連軍が宣戦を布告したのは八月九日であった。ソ連軍は二十二日、旅順師範の寮に土足でどたどたと入ってきた。どうなるか、うろたえるばかりだった。

やむなく安全な工科大学の興亜寮に一時避難することになった。

## 水師営行き

九月八日には繰り上げ卒業式が行われ、十日には学生生活や寮生活等の思い出深い旅順を離れ、水師営陸軍病院へ収容された。私たちは思ったより早く日本に帰れるかもしれないとわずかな期待も抱いたが、先の見えない行く手は暗澹たるものだった。私たちを見捨ててはならないと判断された吉原先生と、四人の女子教官に付き添われての水師営行きとなった。

陸軍病院での仕事は、炊事の手伝い、掃除、洗濯が主な仕事であったが、周りには有刺鉄線が張られてソ連兵に監視され、いかにも捕虜になったという思いであった。夜中に小銃の音が聞こえた。日本の軍人が撃たれたのかなと切ない悲しいやりきれない気持ちだった。

## 海城捕虜収容所で

吉原先生の「旅順の回想」を読むと、生徒を一日でも早く帰省させようとしたが、満鉄の汽車が不通になり、その機を失ってしまったことが書かれてある。私たちを早く安全に親元に返すためには、いつソ連に送られるかわからない部隊から引き離すことが先決と、必死になつて、あちこちに働きかけられ、そのおかげで六十余名の寮生は救い出されることになった。

以下吉原先生の「旅順の回想」からの一部抜粋です。

『十月二十四日に再び第二次の部隊は出発した。私どもはこの部隊について行った。駅頭で夕暮れ、待ちくたびれて、焚き火で暖をとり、ようやく汽車にのつた。今となつては、ふまれでもけられても、ついていかなければならない。どこへ行くのか、行く先は判らない。日本に近づくのか遠くのか判らない。その夜、おそく停車した駅をそつとのぞくと、見覚えのあるたたずまいは、大連駅であった。このまま脱走しようかというものもあった。成功すればよいけれど、監視が恐ろしい、まず成功はおぼつかないと考えねばならぬ、此処で撃たれたのでは何にもならぬ。ではせめて手紙でも残そうかということになって、線路に落としたり生徒もあった。その手紙がどうなったかは知らないが、あとで女子師範の生徒は捕虜になつて奥地へ送られたという噂が流れたということである。

ここで忘れられない事がひとつあった。海城の収容所にいた時、水師営の将校から、青酸カリ五十人分入りの瓶を渡されたことがあった。何のためにくれたのか判らないがもらった結構ですと言つたらおこられただろうが、私どもは、今日まで一度も死のうと思つたことは無い。ましてこんなものを飲んで死のうなど考えたこともなかった。幸いにそのような危機もなくすごせた。それで今日までその劇物のことも忘れていたのに、ルツクのハンドバッグを整理中に小さい箱を何かしらと見たら、おそろしいこれであった。あのアンペラ罫の便所こそ、丁度よい捨て場ではないか。誰にもふ

れず、知られず、後顧の憂いなく私はここに捨てた。』

こうして私たちは二十六日に海城についた。それから二日後、残りの四十数名は東部官舎の畳の敷いてある空き家に移った。私もこの中に入っていたが、不安でたまらない気持ちをどうすることも出来ないほどであった。

鞍山に行った部隊と共に運ばれた吉原先生の荷物をロシアの将校に頼んで探したら、仏像、陶器類、源氏物語、万葉集、日本書紀、年表等もあつたそうで先生もどんなにか喜ばれたことだろう。無事に返った不用の荷物は海城の街でお金に換えて越冬に耐える準備に使われたのだった。

十一月になって奉天・新京からぞくぞく、家族が迎えに来た。私は、父が女学校三年の時に亡くなったので、第一人を残してはとも母が迎えに来てくれるはずはなく、心細さに今にも泣き出しそうな毎日だった。嬉しいことに加藤さん(旧姓)のお父様が迎えに来てくださることになった。奉天まで同行させていたいただいたのは、山崎さん(旧姓)私能勢(旧姓)の二人だった。四人は貨車に乗った。

すみっこの方に坐り、むなしく切なく耳にひびく汽笛や車輪の音を聞きながら、奉天へ奉天へと気持ちにはやり続けた。加藤さんのお父様に対してはありがたい気持ちでいっぱいだった。

あれから六十年、平穏な日々を送って八十歳を迎えようとしている今、心の中に封じ込

めていた終戦時の体験を思いきって書き綴ってみた。

古い記憶を手繰り寄せたので正確でない部分もあるかもしれないが、私たちを救ってくださった吉原先生の手記を参考にさせていただいたことで書けたのかもしれない。

はるかな旅順の爾霊山を思い浮かべ、過酷な体験だったけれども、あの日々があつてこそしなやかに強く生きてこられたのだとありがたく思っている。



東大原時代の今村先生

## あれから半世紀

江渡雪子(元教諭)

十一月三日、東大原で最初に受け持った子どもたちのクラス会があつた。毎年開かれるこの会は、いつも二十名を超す盛況だ。少し早く集まった者たちで下北沢の街を散策。すっかり変わった道筋を辿りながら、ここは何屋があつた、ここは誰さんの家、この店まだあるんだ、と思ひ出を探る。最後に新しくなった東

大原小学校を訪ね、校舎の中も見せて貰う。当時三年生だった子どもたちも還暦を過ぎ、私との差はぐんと縮まったが、半世紀を経ても会えば瞬時にあの頃に戻れるのは嬉しいことだ。賑やかな話し声がいつまでも続く。

当時は、ベビーブームの真っ只中、一学年が三百人弱、遠足には、貸切電車が代田橋駅に臨時停車してくれ、目的地までノンストップで走ってくれる。今思えば夢のような時代だった。

衣食住の全てが不足し、まだ防空壕に住んでいた人もいて、焼け跡の学校は、教室も足りず二部授業。焼け残った校舎はおんぼろで、階段は腐食して歩くたびにゆさゆさと揺れた。給食の時間、脱脂粉乳を配る係は、大やかんを持つ子とカップに蓋をする為の紙を持つ子と二人組。二階でも給食を配っているの、歩く度に天井裏からゴミが舞つてきて、カップのミルクは、忽ちごまを振りかけたようになる。ミルクを注いだら、すかさず蓋をしなければ、飲めなくなってしまうのだ。

ないないづくしの学校生活だったが、先生も子どもも、勿論親たちも、みんな仲良しだった。当然意見の違いで大激論になることもあつた。それが尾を引いて仲違いすることはなかった。親子以上の年齢差があつても、それぞれの違いを認めて、大人の関係を保てる先生達。五十人を越す担任児童一人一人に心を配ろうと努力する教師達。我が子のような新任教師を、先生として立て、子どもの前で担任の批判をしたりすることは、決してなかつた親達。

(このような親たちに教師として育てられた部分は大きいと思う。)

色々な面で、豊かさに満ちていた学校の姿は、次第に失われてしまったのではないだろうか。そこに暮らす教師、子ども、親たちのことを思うと、物質的豊かさと引き換えに手放してしまったものの大きさを思わずにはいられない。ここまでこわされてしまった日本を、修復することは出来るのだろうか。

当時一緒に東大原で過ごした校長以下職員達が、退職、転勤等で別れていった後、大原会として年一回集まってきた。半数近くが物故者となった今も集いは続く。今年も八名が参加し、昔話に花が咲いた。更に、十月半ば、今は信州に住む二人を、東京からの四人が訪ね、一泊して楽しんできた。半世紀を超えるつき合いが、途切れることなく続く東大原の昔は、誇るに足る学校だったのだと思うし、その伝統は、今もきつと受け継がれていると信じたい。



東大原時代の江渡先生

## 故富澤交子先生のこと

後藤茂彦(二四回生)

わたくしは昭和二十六年三月卒業(六年一組)です。入学の年が終戦の年で疎開先の九州から焼け残った大原の家に戻って通った。一年生の時は松本先生が担任であったが、その後二年か三年のときに富澤先生になった。当時女学校を卒業したばかりの新米の先生であった。背が高くあられ、ご自宅のあった杉並区和泉町から大原の浄水場を経由して学校まで徒歩通勤であったが颯爽としたその姿は親しみというよりは畏敬のまなざしで見えていた。

当時はクラス替えはなく、六年の卒業時まで同じクラスであった。富澤先生は卒業記念にガリ版刷りでクラスの名簿を作ってくれて、それは色あせて今でも手元にある。富澤先生はわれわれの卒業と同時に結婚退職された。したがって教え子は前にも後にもおらず、われわれ男子三一名、女子二三名のみであった。その名簿のおかげで卒業後も田中一光君(テラー田中)や秦菊枝さんらの名幹事役のおかげで富澤先生を誘ってクラス会や温泉旅行をしてきた。イヤが上でもクラスメートの団結は強くなっていた。そしてそれが富澤先生の教師をしたことをこの上なく幸せな一時期と思っておられたと察します。

女子生徒はその後の進路としてほぼ全員が専業主婦になったが、男子生徒はそれぞれの分野で仕事をした。また博士二名、上場会社の社長二名輩出した。一方家系を継いだ靴店



24回生6年1組クラス会

主、都バスの運転手と言った生活密着の職業に従事した者もいたが、ひとたびクラス会になるとそのような違いはすつ飛んで仲良く談笑し旅行を楽しんだ。

わたくしは仲間三名とともに東京農業専門学校付属駒場中学校に進学した。その後の新宿

高校時代に文部省(現文部科学省)の選抜試験にとおり、昭和三十一年から一年間米国の高校に留学した。

当時海外渡航は限られており、本皮の表紙の手書きで「修学のため米国に赴くから」と書かれた旅券を手にして二週間かけて氷川丸で太平洋をわたった。留学生は米国各地に分散して家庭に預けられて現地のハイスクールに通った。一年間日本語を話す機会はなく、語学はその後不自由しなくなった。米国の家庭で「医者か弁護士になれ」と叩き込まれ、帰国後大学で苦勞したが、卒業後弁護士を選んだ。

当時日本経済が国際化に向う時代でわたしは日本企業側を代理して多くの国際訴訟や契約交渉に携わった。これを元を質せば小学六年生で初めて富澤先生に習い褒められたローマ字学習であった。

富澤先生は平成一五年一〇月二四日にご逝去された。すでに鬼籍に入った同期生六名とともに校庭でドッジボールを楽しんでいるのではないかと思う今日この頃です。

「アイ」して下さい。

大村昭夫(一七回生)

私が同窓会に力を入れるようになったのは、私が都で建築の技術職で課長になった時、丁度知事も美濃部亮吉さんから鈴木俊一さんに変わられて、企画審議室に呼ばれ、知事のブレインとして長期計画を作るときでした。

今と同じように毎週金曜日に知事の記者会見

があり、そこで或る記者から「知事はコミュニティ」とおっしゃるけど知事のお考えのコミュニティとは具体的にどんなことですか?と質問されました。知事は暫らく考えておられましたが、やがていきなり「アイです」と言われました。謹厳実直な知事さんが「アイ」などといわれたので一瞬、皆、しゅんとしてしまいました。やがて補足して「地域への愛が特に大都市、東京においては不足して居りコミュニティが必要なのではないのでしょうか?」

「勿論『地域愛』は議員さんや町会長さん達が基本的には当たっておられますが、もうひとつ学校を中心としたコミュニティが車の両輪となつて育ってくれると有難いと思っています。」そこで我々は学校を中心とした防災計画や組織づくりの計画を東京都の長期計画に盛り込みました。

やがて都を退職してからのこの「地域愛」の言葉が忘れられず、まず地元の小学校の、戦災でバラバラになっていた一七回生・同級の同窓会「ゆずりは会」の立ち上げに協力し、会長を元古河バッテリーサービス社長の宮澤剛氏に、当時清水建設がやっておられた、清水基金常務の蔭山茂氏と東京都で一緒だった笹間薫(東京女子大学総務部長/旧姓三上)さんを副会長に、住所の判明した、総勢九〇名で創立しました。

丁度、東大原小学校は創立七十周年を迎え記念事業のことで、苦勞なさっておられた同窓会の山中会長になにか、お手伝いしましよ

うかと、宮澤会長等と申し込み、寄付やその他段取りなどについて話し合いを致しました。年がかわつて或る日、山中さんから突然電話があり「PTAが作った名簿を印刷したいから宜しく」と頼まれ、第一製版の社長をしていた同期の故片山義郎君に安くお願いし名簿を作りました。

そして其の発送や事業の後始末をお手伝いしたのが同窓会との関わりです。

そうして、その年、平成十一年山中会長が急逝され、加藤病院の院長加藤清光(六回生)さんが、会長に復帰されて同窓会の活性化が図られました。

加藤会長は、会報の毎年発行や十一年の総会には同期の萩原葉子(朔太郎の娘)さんを講師に呼んだり十四年には同窓会七十五周年を記念して当時トヨタの社長だった張富士夫(二二回生)氏を、十五年には日本社会事業大学学長の京極高宣氏に、十七、十八年には参議院議員になられた中川雅治(三二回生)



作製した同窓会名簿

氏に講師をお願いするなど積極的に会の運営に当たられました。が、ご高齢でもありご家族のご要望により、平成十九年に建築がご専門の法政大学名誉教授・岩下秀男(十二回生)先生に同窓会会長を譲られました。

丁度学校が八十周年を迎えるところでしたので、岩下会長は八十周年記念に学校の歴史を、今のうちに纏めておこうということで都の公文書館や区の図書館など、暑い夏お一人でこつこつと資料を纏められたのが「故きを温ねて」という貴重な本です。

そして約束どおり二年一期で、母校の先生をやっておられ花見堂小学校の校長先生もやられた宮川英子(十三回生)さんにバトンタッチされました。

宮川会長は同窓会の生みの親とも言える方です。同窓会の元となつて七十五周年に作つた名簿は情報公開が厳しくなる直前に宮川会長と私で校長室をお借りして学籍簿から書き写したものです。

お陰様で現在同窓会は理事も充実され、宮川会長が立ち上げたホームページも若い人に引き継がれて、会の事務所もビルの一室をタダで貸して頂くなど、金には換えられぬ「アイ」に満ち溢れています。

処で皆さん「愛」と「恋」の違いは、何かお判りでしょうか？

恋という字は心が下に、これは下心があるからだそう。愛という字は真ん中に心、すなわち真心があることだそう。真心をもつて今後とも同窓会や母校東大原小学校を

「アイ」してください。

## 「おやじに」なった日

窪田賢雄(四七回生)

東大原小学校おやじの会は、七年前に設立されて以来、在校の子どもたちに「おやじ」らしいやりかたで、いろいろな経験をさせてあげていくことを目標に活動しています。

去る二〇〇九年十月十日には、毎年恒例の「校庭キャンプ」を開催しました。このイベントは、子供たちに広く、キャンプ体験をしてもらおうとの趣旨で始まったものです。

校庭に各自が持ち込んだテントを張り、翌日の朝まで宿泊体験をします。もちろん、本格的なかまどを作り、薪や炭で火を起こして調理もします。親子で参加して、グループでまとまって行動します。横のつながり、縦のつながり、親同士、家族ぐるみもつながりも広がるイベントです。

本年度はインフルエンザ流行の影響から、宿泊なしの日帰りイベントとなったのは少々残念でした。しかし、それでも親子合わせて二〇〇名以上が参加。さらには同窓会幹部の方々にも参加いただくなど、子どもたちとの交流だけでなく、地域のつながりづくりにもなった良いイベントになりました。

おやじの会メンバーは、朝から会場準備に汗を流しました。組み立て式の大型テントを張り出し、テーブルや椅子、かまど用のブロック、炭などを運び、校庭を走り回りました。

お昼には、参加の子どもたち、父母が集まっています。あらかじめ決められた班ごとに、思いのメニューで食事作り。子どもたちも包丁を持って料理にチャレンジ。バーベキューやカレー、中には本格的な料理まで登場。校庭が子どもたちの元気な声と、美味しい食事の香りに包まれました。お楽しみはそれだけではなくありません。恒例の「おやじ鍋」は大鍋で作るおやじの会、伝統の豚汁。全員分をおやじの会OBメンバーが作ります。



おやじの会校庭キャンプ

そしてダンボールを使った新しいボールゲームを企画。おやじメンバーが子どもたちと一緒に楽しんでました。

夕方からは、子どもたちが一番楽しみにしている、「校内探検」。屋上から三階、二階へと真つ暗な校舎内を探検します。もちろん、おやじ扮する、オバケさんが多数お出迎え！

校内に響く悲鳴、「怖くないぞお〜」と叫びながら、怖がる子ども。おとうさんにしがみつきます。途中心リタイヤ続出のこのイベントですが、「来年もやりたい」の声多数。

夜六時の解散まで、休む間もなく走り回り、子供たちと楽しんだイベントでした。

東大原小学校の在校生の父親が、学校の子どもたちの「おやじ」となり、そして地域とつながる、「地域のおやじ」になった日。おやじらしいやりかたで、子どもたちと向き合った、そんな一日でした。

子どもたちの満足した笑顔。これがあるから、おやじの会はやめられません。

## 小学校時代の思い出

中川 雅治（三二回生）

私は昭和二八年に東大原小学校へ入学し、昭和三四年に東大原小学校を卒業しました。そして、今でも当時と同じ住所に住んでおり、二人の息子も東大原小学校を卒業しました。ですから、東大原小学校の変遷や周辺の商店街、住宅地の移り変わりをずっと見てきました。

たので、私の小学校時代のことを思い出すと本当になつかしい気持ちで一杯になります。

当時の我々の学年は五〇人位のクラスが四つあり、今から思えば学校は児童であふれているような状況でした。周辺には原っぱもたくさんあり、放課後は皆でよく外で遊んでいました。友達の家にもよく遊びに行き、屋根の上に登ったりして叱られたこともしばしばありました。

私の家の左隣の坂口さん宅とは塀の下を掘ってそこから行き来してましたし、右隣の岡本さん宅とは塀を登ってお互いの子ども同士が行き来してました。岡本さん宅の庭には大きな池があり、おたまじゃくしや、やごなどをよく採ってました。我が家の庭の山椒の木にはアゲハチョウが毎年卵を生んでいましたので、青虫となつて、さなぎになる様子をよく観察してました。庭のいちじくの木には、かみきり虫がいてよく採ってました。今はこうした昆虫を見かけることはありません。

下北沢駅北口のマーケット（通称やみ市）も、今は空いているところが多くさびしい感じがしますが、当時は大変な活気で、私はおもちや屋さんによく行き、相撲の力士の写真を買っていました。新聞紙で作った小さい袋にお相撲さんの写真が入っているのですが、外からは中が見えず誰の写真かはわかりません。一回五円位だったと思います。新聞紙の袋を一つだけ買って中を見て、自分の好きなお相撲さんの写真だともうれしくなります。そして写真の裏に「当たり」と書いてあると、大きな

写真がもらえます。横綱吉葉山の土俵入りの写真や大関三根山の優勝の写真などが手に入ると大喜びしたものです。

当時、紅梅キヤラメルというのがあって巨人軍の選手の写真がおまけに付いていて、一チーム全員の写真と水原監督の写真が揃うとボールペンがもらえました。水原監督の写真はめつたに入っていないので、全部そろった時は大変興奮しました。そして、学校が終ってから友達と一緒に確か下高井戸あたりの本社に歩いて行ってボールペンをもらい、大切に使用したのを覚えてます。今の子供達はDVDを見たり、ゲーム機などで遊び、飽きたら次から次へと新しいものを買っています。素朴で安価なおまけを集めて今から思えばどうってことのない景品をもらって喜んでた頃が本当になつかしい気がします。こちらの時代の子どもたちが幸せなのかを考えさせられることがあります。今から五〇年後の子供たちの幸せを築くために私達が努力していかなくてはいけないと思うこの頃です。（参議院議員）



中川 雅治（32回生）



ホームページでの出会い  
宮川会長と三品(14回生)さん

が思い頂き、咲き出話に花  
が咲きました。

ホームページが再会をお手伝いをしました  
同窓会ホームページの「皆さんの声」に秋のある日、次のような書き込みがありました。  
「私の父は第三荏原出身の八十歳です。現在さいたま市に住んでいます。少しボケが出始めましたが、元気なうちに父の思い出の場所と一緒に歩きたいと思っています。」  
『荏原の娘』というペンネームでの投稿でした。そのお父様の思い出の中に「むかし大原に住んでいた。学校は第三荏原・…」ということ、娘さんが同窓会のホームページを見つけて、投稿されたのでした。  
投稿を読んで、私は早速「お会いしましょう」と伝え、学校にも参観を申し込み、旧友との再会のため、近くに在住の同期のお友達を探しました。  
十月三十日、母校校門前で父娘お二人をお待ちしました。  
穏やかな笑顔のお父様とやさしい娘さんでした。十四回生三品善美さんで、昭和二十年五月の空襲で被災し転居して以来の母校訪問でした。校長室を訪れ、在校当時の大久保友三郎校長先生の写真の下で記念写真を撮りました。この後、連絡してお願いした同期生の永坂友一さんご夫妻も一緒に来て、「味」を頂いたのでお話をしながら、花を咲かせました。

平成21年5月から平成22年1月末までに会費・寄付を頂いた方々

07 中田 太郎	13 立山 千嘉子	25 岩崎 敏之	31 雄二
08 小泉 秋子	13 山本 恒英	26 菅 浩一	31 照俊
09 平田 澄子	13 西村 英昭	26 菅 英次	31 本邊
10 望月 令子	13 福島 昭子	26 菅 喜美子	31 藤村
11 朝倉 啓子	14 鈴木 到江	27 菅 勝一	32 藤村
11 嶋田 新一	14 大月 文江	27 菅 央夫	32 藤村
11 船木 良子	15 小林 洋一	27 菅 保彦	32 藤村
11 角田 瑶子	16 伊達 彦三	27 菅 彰敬	33 藤村
11 青井 文朗	17 山田 順毅	27 菅 朝修	33 藤村
12 加藤 信一	17 板橋 正直	27 菅 朝修	35 藤村
12 渡辺 内男	17 岡崎 正精	27 菅 朝修	36 藤村
12 大野 元生	18 菊田 武彦	27 菅 朝修	36 藤村
13 井安 貞勝	22 西岡 弘章	27 菅 朝修	37 藤村
13 島田 公明	23 大塚 幹雄	28 菅 朝修	37 藤村
13 渡辺 俊男	23 安藤 藤彦	29 菅 朝修	38 藤村
13 山崎 成一	24 後島 勝美	29 菅 朝修	39 藤村
13 五郎 川栄治	24 島 樹	29 菅 朝修	
13 小島 貞子	25 三	30 菅 朝修	

(数字は回生)

この後、お二人は昔住んでいた辺りを歩い懐かしいひとときを過ごされたそうです。やさしい娘さんのホームページへの投稿で、お父さんに思い出のひとときをプレゼントされたのでした。ホームページの役割を改めて感じました。  
この書き込みには同窓会の神谷さん、斉藤さんも気付いて、温かい対応をして頂きました。(宮川英子)

本同窓会は政治・宗教・思想について中立を守ります

郵便番号一五五〇〇三二  
世田谷区北沢二丁目三五の九  
小清水ビル五階  
東大原小学校同窓会事務局  
FAX 〇三二五五四一五三五六

**参加者募集「学童疎開の跡を訪ねて」**  
五月一日 浅間温泉 栄の湯一泊での親睦旅行を計画しました。五月一日朝下北沢ナザレン教会前に集合し、有志の運転する複数台の車で出発し一六日の夕方帰京します。  
宿泊は東大原国民学校の学童が集団疎開で泊まった古い旅館です。  
一六日には伊那の疎開先も回ります。多数の参加希望を募ります。連絡は同窓会まで

**編集後記**  
本年度から会報を年二回発行することに致しました。総会の内容のお知らせが翌年になってしまふのでは時機を失するとの事と、少しでも会員相互の交流の場を広げたいとの思いからです。従って今回の二号は総会の予告及び会員の皆様からの寄稿を主体とした記事となりました。

**同窓会への連絡、問い合わせ、寄稿の送付、送金の方法について**  
同窓会の事務所の所在地は、会則では「東大原小学校」となっております。しかし現状では、学校内で事務を行うことが学校管理上の理由で出来ません。会員各位にはこの点でご不便をお掛けします。現在の事務局の住所は左記のとおりです。連絡は郵便かFAXでこちらにお願いいたします。